

## 立教の若者が「生徒」から 「学生」に成長するために

— 全カリ総合A「大学と現代社会」の挑戦 —

佐々木 一也

### 1. 「大学と現代社会」という科目がある理由

「大学と現代社会」という科目は全カリ総合Aの第2カテゴリー「歴史・社会」に置かれているR科目(立教科目)である。R科目の「大学論」というグループで置かれている科目で、そのような科目として他には「大学とミッション」「日本の大学世界の大学」「立教大学の歴史」がある。これらの科目は、大学が社会に当然存在するものとして受け容れられ、同世代の多くの人々がそこで数年間を過ごす社会装置になったとの同時に、40年ほど以上前の大学とは大きく様変わりしていることから、その存在意義が大きく変化していることに問題意識を持って、設置されている。いまや、大学は当たり前の存在なのだが、その一方で大学はその存在意義を常に自ら問い返し続けなければならない存在でもある、という特殊性を持つゆえに、「当たり前化していること」自体が大学の存在を大いに脅かしているのだ。それゆえに、学生たちにとってすでに自らが身を置く場で

あり、その存在が自明化している大学を、敢えて反省の対象としてその眼前に提示しよう、というのがこれらの科目の設置目的だといえよう。

その中でも「大学と現代社会」は、多くの仲間が当たり前のこととして身を置く場となってしまった大学が自分にとって、あるいは自分がこれから所属する社会にとってどのような意味があるのかということ、学生たちに直接考えさせる授業である。この科目が始まって6年ほどになるが、当初から池袋と新座で前期と後期1コマずつを開講し、私が担当してきた。ここでこの科目を担当する動機となった私自身の問題意識を開陳しておこう。

それは、学生が大学という場の特性を知らないで入学してきていることへの危機感である。まことに残念なことではあるが、現状の学生たちは、与えられたものを無批判に記憶し、教師や力あるものが期待する回答ができるようになることが勉強だと思込んでいるものが大半を占めている。それゆえに我々大学教員は学生たちに研究者が直接講義するということの意義と、教

師に倣って自分で考える力を身につけるための大学での学習法を取って教えてやらなければならない。最近の学生たちは自分たちのことを「生徒」と呼ぶ。高校までの管理される生活に慣れきっている彼らは、大学もこれまで過ぎてきたところと同じ意味で「学校」であると思ひ込み、「生徒」として「学校」としての大学の命ずることに反発したり迎合したりしながら、「学校」の範囲内で行動しようとしている。このような彼らの意識を改善しなければ、入学後に急速に目標を失い、無為にモラトリアムの時間を過ごしてしまうか、あるいは、入学後いきなり世間に晒され、無批判にその流行に巻き込まれ、卒業後のことを考えて、役立つと今世間で言われている資格の取得などに関心が飛躍してしまう彼らの行動を改めるのは難しい。

私の考えでは、そもそも大学とは、少なくとも教育機関としては、学問研究の専門家にならない人にとっても、一時そこに身を置くことによって現実生活のあらゆる利害から離れ、自分自身や自分にまつわるあらゆる事象を相対化し、大所高所から将来の自分を見据えるためにゆったりした時間を過ごす場であるべきだ。いつまでも社会に出ることを考えないままにいるか、あるいは、いきなり新入生の段階で時流に乗った就職を強く意識するか、いずれにしても今の学生たちの多くは極端である。そのような若者をそのままに

放置しては、大学は本来社会から付託された役割を果たすことができない。大学は社会の変動に大きく左右されることなく、常に一定の向きを向いていることが期待される羅針盤のようなものだからだ。それが長い目で見て社会の安定をもたらすのである。自律的に考え、人間、社会、自然を対象として自由に研究することができる大学教員が、その知的活動をリアルタイムで学生たちに伝えることによってこそ、大学は社会の羅針盤たる卒業者を輩出することができる。大学がそのような役割を果たすことができるためには、学生たちはまず完全に自由にならなければならない。そして、そのためには彼らは強靱な自律的思考力を備えていなければならない。そして、その力を育てるカリキュラムこそがリベラルアーツなのであり、立教大学では全カリであるのだ。

## 2. 今年度の授業概要

今年度は以下の順で授業が進められた。

- 1) 現代大学問題入門（私自身の問題意識の開陳と学生への励まし）
- 2) 大学の成立・ヨーロッパと日本の違い（学生の自主的団体としての出発）
- 3) 日本における大学文化（新制大学の制度的問題点）
- 4) 大学紛争（世界的な若者の革新エネルギーと日本の大学の矛盾が表

面化した時代)

- 5) ドイツの大学 (旧制大学がモデルにしたアカデミックなスタイル)
- 6) アメリカの大学 (新制大学と現代の大学改革がモデルとしている方向性)
- 7) 日本の大学制度の特徴 (米独との比較から日本の大学の特徴を探る)
- 8) 社会で役に立つ学問とは何か (学問の自律性と社会との連携のバランス)
- 9) 学生と学問 (学生が個人として社会人として学問的教養が力となる生き方)
- 10) 大学における学生の役割 (教授会自治の精神と学生自治会の意義)
- 11) 大学卒業者の果たすべき役割 (羅針盤を維持する力としてのエンジンブレーキ)
- 12) 日本の大学の再生のために (学問文化の発信地として期待される学生の役割)

この授業では、現状で学生たちが勉強しない、レベルが下がっていると言われる原因が、必ずしも学生に内在していないことを強調している。日本が模範としてきたドイツとアメリカの大学や学問文化の土壌を日本社会と比較しながら、日本が真の意味で創造的学問文化が育ちにくい場であることや、一定の経済的繁栄を実現してしまった結果、一般市民に勉強意欲がさらに盛り上がる土壌が日本では十分に形成さ



筆者

れていないこと、また、文化的再生産の傾向が強まり多くの若者に無力感が蔓延している事態などを説いている。そして、学生たちに自分の置かれている学問文化の実情を知ってもらい、このままでは自分が生活して行く足元である日本社会の土台が腐ってしまい、自らの生活も立ち行かなくなる可能性があることを直視して、自分たちが何とかしなければならないという危機意識を喚起している。この授業で一番伝えたいことは、学問文化を身につけることによって、自動車のエンジンブレーキのような力が育つということである。それは周りからどのような力を受けようと、自分が良いと思う方向に、良いと思う速さで、着実に進むことができる力である。周りが停滞しているときには指導的に速さと方向性を示すことができ、周りがあまりにも急ぎ過ぎているように見えるときには、敢えてその流れに乗らず、力を発揮しながらゆっくりと進む生き方、そのような「自律的に考え生きる力」を私は学生たちに大学で身につけて欲しいと願っている。

### 3. 授業運営上の工夫・苦労

この種の授業は一方的にしゃべることだけでは不十分である。もちろん、教員は自分の学問研究の動機、意味、その方法、身につけ方などの情報を伝えることはもちろんであるが、もっと自分の研究の舞台裏も見せることが必要だと思われる。なぜならば、学生たちは出来上がった学問の結果としての美しい体系性や社会的効用を示されても、その素晴らしい一端を理解することはできるだろうが、そのことによって自分でそれを再現する術が身につくわけではないからだ。むしろ、教員自身の学問的苦闘、失敗例、理想とその挫折などを正直に示すことによって、学生たちは自分たちと等身大の学問文化を知り、それに倣うことができるからである。その際に、学生たちが講義の内容のどの部分に関心を持ち、どのように真似しようとするか、あるいは拒絶されるのか、ということを授業のたびに確認することが不可欠である。学生の理解度の測定以上に、学生の積極的関心のありかを知るという意味で、リアクションペーパーは欠かせない。

私は授業では内容概要を記述したプリントを配布するが、それは講義の前の回に配布し、あらかじめ読んでくることを前提に行っている。ただし、資料が必要な場合には、その資料は講義当日に配布している。あくまでも予習は概要の理解でよいからである。本当

の理解や資料に当たりながら実地に考える作業は、あくまでも当該講義の中で教員の指示に従って行ったほうが良いと考えているからだ。

その意味で、この講義は大学論や大学史についての客観的情報を提示しながら、実は、講師である私の研究者としての個人的活動史の提示でもあるのだ。プリントは客観的な内容が記述してある。しかし、講義はいわば私自身の「私小説」のようなものだ。プリントに書かれているような「事実」が私にとってはどのような意味を持っている、それだから私は何をどうしたか、どのように研究対象にしたか、などが語られるのである。客観的資料を使いながらこのような話をすることによって、客観的知識や他者と共有する社会経験などを一度自分の物として受け入れ、自分に同化することを通して、再び自分にとってより実質化した客観として自らの外に措定するという認識プロセスを、学生たちにも体験してもらいたいのだ。そのことが、大学で学ぶということ「自分のこと」として受け止め、自らの主体的責任においてそれと取り組もうとする姿勢を生むと私は考える。

その意味で、この授業は典型的な全カリ授業だろう。つまり、専門的知識を体系的に示すものでも、その基礎を提示するのでもなく、あくまでも、総合的に遂行されている学生たちの日常生活に位置づくように、知識の形成の

例示がなされ、学生たちの主体的気づきを促すからである。このようにして、私は学生たちに「大学で真の学びを行うこと」を自らの身体に刻み込んで欲しいのだ。

#### 4. 授業を行ってみて

この授業は新座では前期水曜日1時間、池袋では後期火曜日5時間という比較的不人気な時間帯に開講していたせいもあり、熱心な学生以外の履修はあまりなかった。2005年度後期池袋での登録は約140名、授業の出席は常時90名ほど、最終試験受験者は101名だった。毎回リアクションペーパーを提出させるということは、学生たちにとっては毎回出席を取られていることと同じであり、単位のためにはほとんど欠席が許されないという授業であったが、出席数の確保のために出席する学生はほとんどいなかった。それは、この授業が「実質的に学生のための授業」であることを謳っていたのだが、その謳い文句が受け入れられたためだと私は自己評価したい。リアクションペーパーは、私の授業の時間配分の失敗もあり、5分程度で書かなければならないこともしばしばだったが、学生たちは熱心に書き込んでいた。その内容も、自分の問題として受け取っていることが十分に窺われた。

リアクションペーパーを読んでいる限りでは、もともと安易な日常に流されることに疑問を持つ学生たちが多く

参加していることが窺われる。その彼らが、なんとなくおかしいと思っていたことについて授業をきっかけにしてその正体をつかんだり、あるいは大学に入って新しい勉強に意欲を燃やして新しい自分を構築するための大学利用法を身につけたりして、大学での生活を自分にとってより実質的に意味あるものにして、充実した時間を見出すようになってゆく姿を見るのは、教員である私にとっても喜ばしいものだ。中には、この授業に刺激を受けて、大学の「学校」化が進む現状を強く憂えて、たった一人から始める改善運動を試みる学生も出てきた。

リアクションペーパーを見ながら学生たちの気づきの深化を見ることができるのは、授業者としてこの上ない喜びである。その意味では、私はこの講義科目では大学教員として幸せな時間を過ごした、ということができる。

#### 5. 全カリへの要望・期待

前にも書いたが、全カリ科目は教員の持っている専門的学問の世界を体系



授業風景

的に美しく提示して見せる授業では必ずしもないと私は思っている。本来全カリ総合科目は、総合Aも総合Bもいずれも学生に学問を通して世界や社会を自分なりに整合的に理解し、自分なりの体系的な世界観を構築する手がかりを与える授業科目群だったと思う。全カリも発足してから10年以上経ち、それを運営する教員も担当する教員も次々に交代し、誰もが運営し誰もが担当できるカリキュラムになってきた。そのことは高く評価すべきことだと思われる。しかし、その一方で、最近の全カリ改革の動きを見ていると、その精神が必ずしもきちんと継承され議論されていないように思われてならない。もちろん、全カリ出発の精神は建学の精神のようなものなので永遠に尊重されなければならないが、その一方で、それはそれぞれの時代の状況に応じて柔軟に生かされ、運用されて良いものとも考える。だから、現在の状況に合わせて大胆な変容が加えられることにはまったく差し支えない。だが、現在では全カリ精神そのものの活発さが大学当局の主導する改革運動に十分見られないのが非常に残念である。

全カリは専門科目カリキュラムに対する対抗カリキュラムとして、立教の大学教育全体を支えている。もともと外部社会との間には一定の緊張関係を持つアカデミックな学問専門分野のカリキュラムは、それに対する対抗カリキュラムがあってこそ、社会に流され

ずに社会と寄り添えるのだ。「大学と現代社会」はそのようなカリキュラムとして、学生たちに専門科目授業を厳しく見る目を養うことを目的としている。全カリ総合科目全体について、そのような科目の必要性の議論を含めて、活発にそのあり方について議論が行われることを期待したい。

## 6. 学生の声

私の担当する「大学と現代社会」は広報課の計らいで、立教大学ホームページ上の「おもしろ授業紹介」に取り上げられた（取材は2005年6月22日武蔵野新座キャンパスにて）。はじめからやや好意的に取材してくれてはいるのだが、この授業に参加した学生の反応のひとつとして参考にはなる。最後に現在の立教大学ホームページ上に載っている学生の授業レポートをここに紹介させていただき、この文章を閉じることとしたい。

「大学と現代社会——君の将来を拓く  
大学生活のすごし方——」

コミュニティ福祉学科2年次 林玉梅

私たちは輝く青春時代を大学の中で送っている。このステージの上で常に自分が誰であるか、どこに行くべきか、またどのようにして生きていくべきかを考えている。時には、どうして大学に来て、どうして今の専攻を選んだかを考える時、当惑してしまうこともあ

る。

佐々木先生の「大学と現代社会」の授業は社会歴史授業というより、人生哲学授業である。大学の歴史や発展を勉強する中で、改めて大学で勉強する意義、真に役に立つ学問は何かを真剣に考え始め、自分の人生を拓くためにどのような大学生活を過ごすべきかを検討するようになった。

今の学歴社会で人々は厳しい競争をさせられ、心の豊かさ、精神の自由を求めるとしても就職するときメリットになる学歴ばかりに目が向いている。そして、物質的な生活は豊かであるが、過度の競争により心が歪み、自分の社会的な存在を失いがちである。だが、「人はパンのみに生きるにあらず」。大学の4年間は私たちにとって、自分の人生を選択し、生きるために本当に役立つものを身につける準備期ではないかと思うようになった。

URL:[http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kohoka/univinfo/class/gakubu/topics2005/2005\\_05.htm](http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kohoka/univinfo/class/gakubu/topics2005/2005_05.htm)

ささき かずや  
(本学文学部教授)